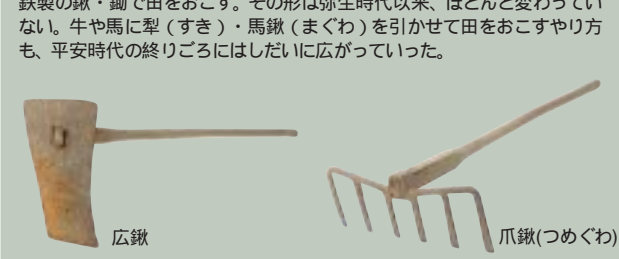
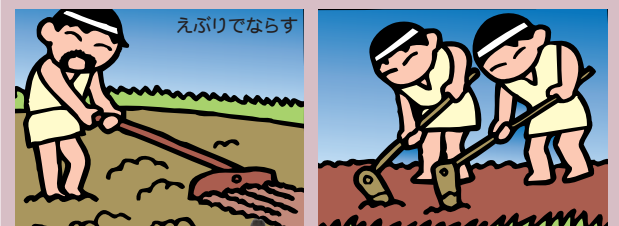


弥生時代

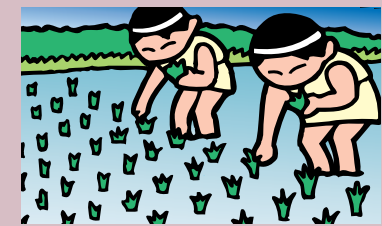
ひと昔前

現在

田おこし



田植え



稲刈り



鎌で1束ごと、根本より刈り取る。



水田跡 (松江市・夫敷遺跡)



田打ち車で除草する



除草剤をまく

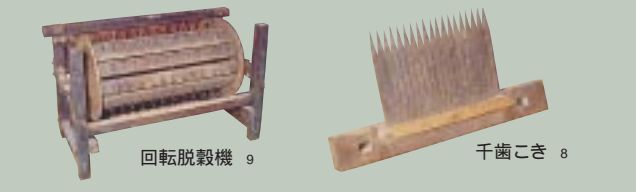
脱穀



臼(うす)と杵(きね)を用いて稲穂を打ち、脱穀と精米を同時に行う。

杵 (松江市・原の前遺跡出土)

千歯こきの歯に稲穂を通し、籾(もみ)をとる。また明治時代以降、歯のついた筒が回転する足踏脱穀機(回転脱穀機)が登場する。



ライスセンター  
刈り取った籾はライスセンターに持っていき、乾燥と調整(籾殻を取る)をしてもらえる。



コンバイン  
刈り取りから脱穀まで一台ですべてやってくれる。



バインダーで刈る。

やあ、こゝろには、毎々は山子だ。こんな怖い顔をしてるけど、こゝろにして田んぼの中に立ち続けると、三三〇〇年になる。その間、ずいぶん移りゆく世の中で、「米作り」がどんなふうに変わっていったのか、つぶさに見てきたんだ。だからこの場を借りて、「米作り」といふものをすこし語らせていだけよう。

上の表を見てもうおぼつかると思うけど、米作りってのはそれが始まった弥生時代から現在まで、基本的な作業は何も変わっていないんだ。縄文時代の終りころ、大陸から稲作が伝わってきたときから、田おこしして、田植えして、稲刈りするって、いつまでも変わらないわけ。

田をおこして稲を育てるの、だいたい一年かかる。その間ずっと付きっきりで、稲の世話をしなくちゃいけない。だから人間たちは、ずっと同じ所で暮らすはめになったのさ。今の日本人の基本的な生活基盤は、弥生時代の米作りから始まったといえるね。

じゃあ、何が三三〇〇年の間に変わったのかというと、米作りのための農具なんだな。田をおこすための鍬や鋤は、弥生時代は木製だった。それがいつしか鉄製に変わったという具合に。でもその形は今の鍬やスコップとほとんど同じだから、変わったとは言えないかもしれない。

変わったと言えるのは、稲の収穫の方法だ。弥生時代は「石包丁」という石の道具で稲を一種ずつ摘んでいった。能率が悪そうに見えるけど、そのころの稲は成熟するのがバラバラだった。脱穀は臼の中に稲穂を入れて、それを杵でついてやってたから、穂摘みにしたほうが都合がよかったんだ。

その後、稲穂の成熟も一定になってきて、今度は鎌を使って稲の根本からまとめて刈るようになったのさ。鎌を使った稲刈りは最近までずっと続いてきたんだけどね。

脱穀はどうだろう。臼や杵を使ったり、稲穂を木の棒にさして引く張ったりしてたけど、江戸時代に「千歯こき」が発明されて、ずいぶん楽になったな。米の精米や選別にも「唐箕」や「千石」といふものが使われるようになった。でもそれらはすべて、手でやってたことに変わりはなかった。田植えなんて、弥生時代からずっと手で植えていたんだ。

ところが、作業や農具が機械化されてすべてが変わった。昭和三〇年代ころの話だけど、ぼくから見れば「い」のあいだのことさ。急速に普及して、それまでの道

